

これだけは世界に発信したい 日本についての18章

中村 順一

文章・画像の無断転載・転用・複製・メール等での転送はご遠慮ください。
本ファイルは印刷できないよう設定しております。

皆さん、こんにちは。中村順一と申します。今回、「これだけは世界に発信したい——日本についての18章」を始めるにあたり、まず簡単に自己紹介させて頂きます。



「イギリス留学の日に」(著者の父撮影)

私は現在八十一歳です。これまで外国に関わる仕事が長く、半世紀余り続きました。海外にも七か国、合計二十年ほど住みました。日本の大学を出て、二年間英国に留学し、西欧の素晴らしさと凄さを痛感いたしました。一方、熱心な仏教徒の家系に育ち、中学・高校時代から鎌倉の禅寺で座禅を組み、日本の伝統文化と東洋的な考え方に関心を持ちました。その後も、日本や東洋への関心は続き、国際的な対比の中で、日本と東洋の位置づけが常時、脳裡を

離れませんでした。日本に戻って、十年あまり京都に住み、関心はますます深まりました。今でも、東京と京都の往復生活が続いています。このような体験を通して、自ら見聞し、心に残ったこと、感じていることをとりまとめた、と思うようになりました。まだまだ中途半端ですが、現時点での私なりの問題提起ということで、チャレンジすることにした次第です。「養生訓」の著者、貝原益軒が八十歳になって執筆活動を始めたことを知り、これが刺激にもなりました。

このシリーズを始めたかと思つた直接の動機は二つです。一つは、外国人向けに日本についての本を英文で書きたいと思つたことです。明治になって、日本人の書いた英文の日本紹介の名著がいくつか続出しましたが、最近、日本人による日本についての、外国人一般に向けた著作が、少ないことを痛感しています。これまで日本は、受信大国として、外国からの文物を取り入れながら発展してきましたが、これからは、国際関係の一層の緊密化の中で、逆に、発信大国として、積極的な役割を果たすことが期待されます。このシリーズの完結次第、一石を投ずる意味で、早速英文での執筆に取り掛かり、明年には英語版を完成したいと思っています。

もう一つは、日本について、これだけは外国に発信したい点と、自らのささやかな経験から外国人が興味を持つと思われる点の双方を、日本の方々を知っていただきたいとの思いです。日本には、世界にとって示唆になり役立つことが沢山あり、日本の感性には、世界に類のない独特の味わいが満ち満ちています。また、日本は東洋の叡智が凝縮して現存する貴重な国です。これらを、日本人、特に日本の若い世代に自覚して欲しいとの思いで、このシリーズを始めたわけです。

執筆にあたって二点付言しますと、第一に、このシリーズは日本に焦点をあてていますが、西欧との優劣を論ずるものではないということです。西欧には西欧の良さが数多くあり、日本が引き続き取り入れていくことも少なくありません。逆に、日本を参考にしてほしいことも多々あります。二者択一ではなく、それぞれがよいところを取り入れることが肝要です。

第二に、本論は、専門書、研究書ではありません。できるだけ多くの方々にお読み頂くべく、読みやすい内容に心がけたつもりです。ただし、外国の方々を念頭において書いた部分が多いため、日本につ

いての説明が長くなりましたが、こういう点に外国人は関心があるということ、ご容赦頂ければ幸いです。なお、執筆にあたっては、内外の多くの方々の著作を読み、色々な方のお話しをお聞きする機会がありました。その折々に残したメモなどをふまえ、また、自らの体験を顧みて、私なりに自らの思いを表現させていただきました。

今回のシリーズでは、まず身近なところからということ、**「日本の衣食住」**から始め、次に**「日本語」**を取り上げました。何れもユニークな点が数多く、世界に発信したい項目も少なくありませんでした。そのうえで、本シリーズの中で最も発信したいテーマである、**「日本の感性と東洋の叡智」**に進みたいと思っています。ぜひ引き続き、お読みいただければ幸いです。

なお、今回の一八章の章別の見出しを記すと、次の通りになります。

- 第一章 日本の「衣」(和服)
- 第二章 日本の「食」(和食)
- 第三章 日本の「住」(和室)
- 第四章 日本語(そのⅠ) — 世界に類のない言語
- 第五章 日本語(そのⅡ) — 感性重視の言語
- 第六章 日本の感性と東洋の叡智
- 第七章 移ろい — 気配、面影、余韻と余白、間^ま
- 第八章 さりげなさ — 細やかさ、奥ゆかしさ、素朴さ、静けさ
- 第九章 もののあはれ — 雅^{みや}び、わび、さび、粹
- 第十章 察する — 思いやり、気遣い、心配り、もてなし
- 第十一章 和の文化 — 調和と融和と平和
- 第十二章 寛容と包容 — 複数価値の容認、表決の回避
- 第十三章 道と「こころ」 — 本質の見極めと内面の重視
- 第十四章 無と空の思想 — 禅、来世のない世界、先端科学との接点
- 第十五章 自然との共生・一体化 — 自然の取り込み
- 第十六章 自律と分別 — 自らに厳しく、中庸^{ちゆうよう}、謙譲、節約
- 第十七章 世間と人間 — 関係重視、縁、恥、義理人情
- 第十八章 京都からの発信 — 京都には和と洋の東西が凝縮して現存

…………… 日本の衣食住 ……………

日本の「衣食住」は、各国と比較しても極めてユニークです。特記すべきことが数多く、世界に発信したい点が少なくありません。今回スタートする「これだけは世界に発信したい — 日本についての18章」の冒頭に、まず日本の「衣食住」を取り上げ、その国際的な位置づけと世界に発信したい特徴を明らかにしたいと

思います。「衣食住」は、人間の生存に不可欠で、人間にとって最も基本的なものであり、しかも、日本の「衣食住」には世界に誇れるものが沢山あるからです。

第一章 日本の「衣」(和服)

洋服と和服、着物

「衣食住」のうち、「衣」のみは、人間に特有の必需品です。人間には保温のための体毛や毛皮がなく、寒さをしのぎ身体を保護するために「衣」が必要です。また、人間は、羞恥心から身体を隠します。それも「衣」の起源と言われています。その後、次第に、「衣」は身体を「装い」「飾る」もの、という点が前面に出てきました。「身なり」とか「お洒落」に、関心と興味を持つようになりました。さらに、人間が活動しやすい衣裳、生活しやすい衣裳、ということも重要になり、服装によって職業や社会的身分、出身なども判るようになりました。

このようにして「衣」は、世界の各国、各地域で、その土地の事情や背景に適合しながら、様々な発展をとげ、人々の生活や活動に資するようになったのです。その中で現在、最も一般的で、世界に通用しているのが「洋服」、すなわち欧米に由来する服装とってよいと思います。

それに対して「和服」は、古代から平安、鎌倉、室町、江戸と、時代の変遷を重ねてきた日本の伝統衣装です。それが近代になって、明治四年に断髪令が出され、明治中頃の鹿鳴館時代になると、日本の「衣」は大きく転換します。すなわち、洋服が多数派になり、和服が少数派になったわけです。特に、男性の衣装の変化は顕著でした。

日本の場合、その転換は、近代化の比較的早い時点で、しかも短期間のうちに行われた、というのが私の印象です。日本以外の地域や国でも、洋服が普及したところは数多くみられますが、それでも従来からの民族衣装は存続し、それに対する愛着が強いようです。和服には、良い点、素晴らしい点が多々あるので、まず日本人の間で、和服への愛着が一段と深まり、世界でも、和服への関心が広まればと思います。

現在の和服は、通常「着物」といわれています。着物とは「着るもの」で、衣裳全体を意味することもあります。KIMONO が今や海外でも知られていますので、ここでは、和服を「着物」と称することにしました。その場合でも、帯などを含めた広義の着物を意味する場合と、狭義の着物を指す場合があります。

多岐にわたる着物の魅力

衣裳の着用の仕方には、「捲く」「被る」「穿く」「前合わせ」などがあり、様々です。着物は「前合わせ」型になりますが、何枚かの肌着や襦袢をそれぞれ紐で締め重ね、そのうえに着物と帯を着用するという、ユニークな服装です。着物も帯も日本独特のもので、世界に類をみない衣裳です。

洋服が身体を動かしやすく、活動に適する機能的、機動的な衣装であるのに対して、着物は身ごなし

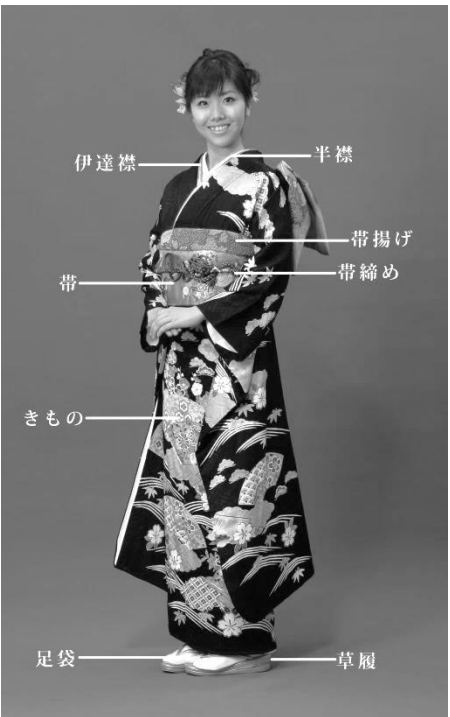
の美しさを強調する衣裳です。この両者の差異は、背景となる文化の相違によります。つまり、躍動、リズムを重視する西洋の「動」の文化と、細やかな身体の動きや流れを大切にする東洋の「静」の文化との違いです。これは、バレエと日本舞踊を思い浮かべれば明らかでしょう。

着物は、身体にぴったり合わせる衣裳でありながら、同時に、着る人の身体に合わせて身丈や胴回りなどを調整できるという「融通性」を併せ持つ衣裳です。これも着物の特徴です。また、季節やTPOに合わせて、着る着物を選ぶという選択肢の「多様性」も、着物の魅力です。

着物と帯という基本的な枠組みが決まっている中で、布地、染めと織り、色と柄などをどう組み合わせるか、それは、まさに着物の醍醐味です。更に、上は髪型から下は足袋・履物に到るまで、それに様々な小物、装飾品、携行品等々、和装のトータル・コーディネーションをさりげない洒落と美しさでまとめていく、これも着物の特色です。

このように、着物は多彩な魅力を有します。以下、これらの諸点につき簡潔な説明を加えていきたいと思えます。

世界で類のない凝った衣裳



京都では、十二単じふにひとへの着付けショーがよく行われています。「十二単」とは、平安時代の公家女子の衣裳の通称で、通常、白小袖、紅袴ひとえ、単衣の衿えりに桂五枚と打衣うちぎぬを重ね、その上に唐衣からぎぬを着て、袴の背の腰に裳もをつけるという、正に日本の「衣」の見せ所です。

現在の着物はそれほどではありませんが、肌襦袢はだじゆばん、長襦袢ながじゆばん、着物を、それぞれ、色とりどりの腰紐、伊達締めで締め、その上に帯を結んで、帯揚げ、帯板、帯枕、帯締めで固定するという、世界の他の衣裳と比べて実に凝った服装です。一例を挙げると、下着である長襦袢に着用のごと、衿えりを縫い付けたり、その衿えりに芯こを通すなど、細かいところまで凝った趣向や工夫がみられます。

帯は通常、幅が三十センチ余り、長さは約3・5メートルと約4・5メートルとの二通りがあります。その長くて幅のある帯を胴回りに捲きつけ固定する訳ですから、着用は容易ではありません。着物の着付けには、従って、時間がかかり、慣れていないと一時間以上かかることもあります。一人で着物を着られない人も数多く、着付けを習う学校や講習があることも日本独特の現象のようです。

着物には、お端折りはしよと云って、着物をたくし上げ、紐で締めて長さを調節したり、前合わせの重なる部分を調整して、ある程度身長や体型の異なる人が着用できる「融通性」があります。これも着物の利点です。親や祖父から着物を引き継いで、世代を超えて着用することも、ごく一般的です。更に、着物には洋服のようなファッションや流行がなく、その意味でも長期的に着用できます。また、着物は布地を直線的に裁ち縫って仕立てますので、仕立て直しも比較的容易です。

身ごなしの美しさを強調する着物

着物は、姿勢と動作の美しさを強調し、美しい身ごなしを保証する衣裳です。多くの外国人が着物に魅了されるのも、この点にあると私は思います。

洋服は、デザインの段階では、細かくサイズを計り、身体に合わせて仕立てますが、出来上がると、ドレスの中に身体を入れるという感じですが。これに対して着物は、身体にぴったり合わせて捲きつける衣裳です。その点で、インドのサリーなどに似ています。着物の特徴は帯にあると言ってよく、帯によって背筋が伸び、姿勢が真っ直ぐになって、姿が美しくなります。それが帯の効用で、コルセットが身体を締め付けて体型を抑えるのと対照的です。また、帯を背中で結ぶ「太鼓結び」も、身体の均整美という点で効果があります。

一般に、西洋が「立つ」文化であるのに対して、東洋は「坐る」文化と言われます。同じ「坐る」文化でも椅子に坐るのと、畳に座るのでは違います。特に、正座は日本独自の坐り方で、隣国の中国や韓国の坐り方とも違います。慣れないと足が痺れ、足腰が痛くなりますが、正座は、身体工学の視点からも、よい坐り方といわれており、健康にもよく、何よりもまず、着物を着ての正座は、見た目に美しいのがポイントです。

身体の動かし方も、着物を着ていると、曲線的、連続的な動きになります。歩き方も、小幅な足取りで、爪先に重心が置かれ、やや摺り足気味に歩くという、淑やかで落ち着いた歩みとなります。立ち居振る舞い、すなわち、立ち上がったたり坐ったり、お辞儀をしたり、履物を脱いで家上がったりする所作、階段の上がり下がり、自動車の乗り降りに到るまで、和の作法にかなった着物姿での動作は、誠に美しいものです。

着物だと自然にそういう動作になるのか、或いは、着物を着ると、そういう動作をしようとする気持ちになるのかはともかくとして、着物には、身ごなし、立ち居振る舞いを美しくする効果があると言ってよいと思います。

季節・TPOと着物

日本は四季に恵まれた国です。衣裳も季節によって変わります。洋服にも夏服、冬服、合服がありますが、着物の場合は、その区別がより明確です。夏の着物が七月と八月、単衣が六月と九月、袷が十月～五月までとなっていて、衣替えの習慣も定着しています。

夏の着物は、絹や紗の生地が一般的ですが、麻もよく使われます。単衣と袷の差は生地の厚さもありますが、基本的には裏地がつくかどうかのの違いです。同じ単衣と言っても六月と九月では模様や柄が変わります。袷の着物でも季節が更に細分化され、それに合う着物が選ばれます。このように、季節や季節感とは着物と密接な関連があり、着る人にとって重要な判断の基礎となります。

季節に加え、TPO（若干、意識になりますが、ここでは、機会・場・状況と訳しておきます）によって、着る着物がかわることも、着物の特徴です。外出着として、黒留袖、色留袖、訪問着、色無地、

小紋、御召おめしなど多くの種類があります。一つに限定されるのではなく、いくつかの種類の中からTPOに依りて着ていく着物を選ぶのです。

着物についての特記事項の一つに、家紋のついた着物、すなわち「紋付き」があります。ヨーロッパなどで、ファミリー・クレスト(家紋)がデザインの一部に取り入れられることはあるようですが、紋付きのように、家紋を入れる箇所が決められていて、しかも紋の数が、一つ紋、三つ紋、五つ紋と、フォーマルの度合いに依りて決まるのは、日本以外にはないと言ってよいでしょう。

その他、着物の種類には、喪服や未婚女性の着る振袖ふりそでなどがあります。振袖の袂たもとの長さは、一メートル余りのものが多く、外国人も含め、着物の美しさとして、振袖を挙げる人も少なくありません。

欧米にもドレス・コードがあつて、例えば、招待状にホワイト・タイ、ブラック・タイ、ラウンジ・スーツなど、男性の服装指定があると、女性の服装もそれに対応してきまりますが、日本のTPOによる着物の選択肢は、欧米よりもはるかに多彩です。

布地、染めと織り、色と柄

着物の素材(生地)も多様です。絹と木綿が代表的ですが、ウール(羊毛)、麻などもあります。また、ポリエステルなどの合成・化学繊維の着物も一般的です。通常、着物には、洋服の三倍ほどの布地が必要とされ、帯にも胴回りの数倍が使われます。

着物は、染める着物と織りの着物に大別されます。前者は、素材の糸を白布地に織り、それを染めるもの、後者は、まず白糸を染め、染めた糸で布地を織るものです。染めの着物には、友禅染め、絞り染めなどがあり、また染色の仕方でも、布地に絵模様を直接描く手描き染めと、型紙を使って模様付をする型染めがあります。織りの着物では紬つむぎが代表的ですが、緋あかや御召おめしも織りになります。

帯にも、染めと織りがあり、織りがフォーマル、染めがお洒落着です。従つて、着物と帯の組み合わせも、染めと織りとで四通りになり、一番フォーマルなのが、染めの着物と織りの帯です。なお、当然のことながらポリエステルなどの合成・化学繊維には織りはありません。

洋服と違つて、着物も帯も基本的なデザイン(仕様)が一定ですので、お洒落とか個性の出し方は、色と柄、模様になります。色は日本の染色技術が伝統的に素晴らしく、藍染め、草木染めなど、自然染料が今なお活用されています。色に対するこだわりが日本人は強く、着物についてもそれが言えます。着物の色のぼかし、グラデーションなどの味わいも着物の美しさの一つです。

柄は、小紋に代表される細かい文様と大柄な絵模様とがあります。小柄文様は、格子縞、唐草模様、絞り紋様など古典的なものを含め多種多様です。大柄紋様には、花や鳥、自然風景など、一幅の絵を思わせるような柄も多くみられます。着物の場合、絵模様が平面にそのまま出て、柄が崩れることがないのも特徴の一つです。

また、着物や帯には、織りや染めだけでなく、刺繡ししゅうもあります。このように、織り、染め、刺繡、色など、多岐にわたる組合せが着物の大きな魅力です。また、日本の各地で、それぞれ特色のある布地や着物が、その土地の名を付けて、生産されていることも特記事項です。

着物のトータル・ファッション

和装は、髪型から足袋・履物に到るまで、トータル・ファッションが重要で、隅々にまで気配りが求められます。最近では、付け帯のように、すでに結んである帯もありますが、基本は、やはり自分で結ぶ帯です。足袋と草履・下駄は、親指とそれ以外の指が分かれて履く、世界でもユニークな履物で、足の指に重心がかかり、安定度が増すと言われています。足袋についている小鉤こはせなども、外国人が感心する芸の細かさの一例です。

着物、帯、羽織、コートはもちろん、帯締め、帯揚げ、帯留めなどの、いわゆる小物、簪かんざし、櫛などの装飾品、バック、扇子、傘などの携行品、髪型やお化粧もコーディネートの対象です。半衿、伊達衿、羽織の紐、鼻緒、それに着物の袖に入れる匂い袋なども、さりげないお洒落のポイントです。和装としての着物は、身につけるものの大枠のパターンが決まっているだけに、着物と帯の組み合わせや、髪型、小物、装飾・携行品などの選択、すなわち、トータル・コーディネーションがより重要になるといえます。

着付けの仕方によって感じや雰囲気かわることも着物の特徴です。衿足を広めにとると、粋な感じになり、狭く詰め気味にすると、落ち着くというわけです。帯や着物・羽織の紐も、結び方で若向きになったり、年配風になったりします。すなわち、色や柄だけでなく、着物の着方で雰囲気が変わり、好みや個性が出たりするのです。

このように、着る人の個性、趣味・趣向、TPOへの合わせ方によって、トータル・ファッションが変わってくる、逆に言うと、着物の着用の仕方や組み合わせによって、着る人の個性や趣向を出す、これが着物の魅力であり醍醐味なのです。

細部にわたる、さりげないこだわりが、日本文化の一つの特徴ですが、これが正に、着物にあてはまり、着物の持ち味であると言えます。また、着物には、「折り目正しく」とか、「衿を正す」といった表現があり、きちんと正しく着物を着用することも、トータル・ファッションの一つに位置づけられます。

男性の着物の勧め

これまでは、主として女性の着物を念頭に置いた説明でしたが、男性の着物にも興味深い点が多々あります。家庭でのくつろぎ着として、着物は着心地がよく、リラックスできるといふ男性は数多く、着物は畳の上の生活に適していると言えます。

外出着としても、フォーマルな外出の場合、女性の着物とは違い、男性は袴の着用が一般的です。袴は、落ち着きもよく、着物ともよく合います。男性の羽織・袴の着物姿は、均整がとれていて見映えもよく、世界でもユニークな、ベスト・ドレスの一つと言ってもよいと私は思っています。

同時に、袴をつけない、いわゆる「着流し」も粋な雰囲気でお勧めです。帯は男性の場合、幅が十センチくらい角帯が通常ですが、家庭着など、カジュアルな折には、兵児帯へいおびという、ちりめんなどの絞り染めの帯を締めることもよくあります。

一般論として、男性の着物は、女性の着物と比べ、地味な感じのものが多ようです。しかし、地味

な羽織に、派手で目立つ柄や絵の裏地を付け、羽織を脱ぐときに、それがちらりと見える、そういう控え目で粋なお洒落もあります。これなどは、きわめて日本のお洒落の例と言ってよいでしょう。

誠にささやかですが、一言、私自身の着物体験に触れさせていただきます。小学校低学年の頃、両親が謡曲を習っていて、子方の役を両親の間に坐って着物姿でつとめたのが、最初の思い出です。中学、高校、大学にかけて、鎌倉の円覚寺へ座禅を組みに出かけるようになり、緋ひの着物、書生袴、高下駄で、横浜の自宅から電車を通いました。その着物と袴を英国留学中に何回か着用したのを覚えています。

その後暫く、着物との縁は中断しましたが、十数年前から、京都に住み、和服への関心が高まりました。京都では時折ときおり、着流しで出かけたり、最近では、初釜の茶席などに紋付・袴で出席するようになりました。着物を着用してみると、気持ち落ち着き、姿勢もよくなります。着心地もよく、気も引き締まるというのが、限られた体験を通しての私自身の着物についての感想です。

着物 —— これからの課題

以上、着物に関わるいくつかの側面を取り上げ説明しましたが、その何れもが、日本文化の特徴と相通じます。その意味で、着物は、日本文化の一つの象徴的な表現といえます。そして、日常の外出・家庭着・仕事着であると同時に、茶道、華道、香道、能、歌舞伎、日本舞踊、などの日本の代表的な文化とも密接な関連を有します。

従来はともすると、着物は、フジヤマ、ゲイシャにみられたように、エキゾチシズムの象徴で、興味本位に捉えられる傾向がありました。これは残念なことです。また、外国人の中には、浴衣ゆかたを着物と違って、浴衣姿でパーティなどに出席する人もいます。更に、最近、京都では、観光で来られる外国人がレンタル着物で街の中を歩く姿をよく見かけます。

着物を着る外国人が増えることはもちろん大歓迎ですが、着物についての正しい知識が広まり、これからは、衣装としての着物の特色や魅力について、より多くの外国人が興味と関心を持って欲しいと思います。

それには、日本人がまず、着物について関心と興味を持ち、理解を深めることが肝要です。とりわけ、若い人たちの理解が必要です。理解だけでなく、実際に着物を着用する人が増え、着用の機会が増えることを望みます。特に、外国人が多く出席する集まりなどには、日本のナショナル・コスチュームとして、着物の着用が一般的になることを期待したいと思います。

最近、着物や帯の生地を使ってドレスに仕立てたり、ドレスの一部に着物の布地を取り入れたりして、それを海外で紹介する人が出てきました。着物を世界に発信するとの視点で、これは嬉しいことです。実際に、織り、染め、色、柄など、ドレスの生地としても、見映えするものが多く、その可能性は少ないと思われまます。

日本と日本に親近感を持ち、日本文化に関心を持ってもらう上で、着物の役割は大きいと思います。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、海外からの来訪者の増加が期待される中で、日本の「衣」、着物についての世界への発信の拡充が望まれます。

第二章 日本の「食」(和食)

日本人と食(和食)

日本の「食」は古くから注目されてきました。三世紀の魏志倭人伝には、「温暖で冬夏、生菜を食す」と記され、五世紀の後漢書倭伝には、日本人は、「酒をたしなむ。多くは長生き、百余才になるものが甚だ多い」との記述があります。日本は、気候が温暖で、農耕が早くから発達し、海に囲まれ海産物も豊富、ということ、食には大変恵まれていました。食についての資料も、古くから時代ごとに数多く残されています。

このような恵まれた状況の中で、日本人は当初より食に対する関心が高く、食の発達も早い時代から今日まで、ずっと続いてきました。しかも、日本の食には、ユニークで、世界に発信できる点が数多くあります。政府関係機関が最近実施したアンケート調査によれば、日本人の九割以上が和食を誇りに思い、世界に発信したい項目として、八項目を挙げています。

これを多い順に列挙すると、(一)旬、季節感の重視 (二)寿司、天ぷらなどの日本料理 (三)出汁だしの活用、素材を活かす (四)醤油、味噌などの発酵調味料 (五)盛り付け、彩りいろどりの美しさ (六)「頂きます」、「馳走さま」などに示される食に対する感情 (七)食器 調度品、和室などの空間の演出 (八)ヘルシーで栄養バランスのとれた食事構成 となります。以下、和服に引き続き、第二章では、日本の食(和食)につき、先に掲げた八項目も含め、順次説明していきます。

グルメの国・日本

日本は、世界有数のグルメの国です。米、魚、野菜、豆類、海藻、果物を中心とする、古来からの和食が、今なお日本人の食の基本になっています。米食だけでなく、うどん、蕎麦などの麺類も一般的です。更に、和食の中には、京料理など、その土地の名前のついた料理も多数見受けられます。比較的狭い国土で、日本程、多岐にわたる名物郷土料理がある国も珍しいのではないのでしょうか。

同時に、中国、フランス、イタリアなどの各国料理・エスニック料理も多様です。また、国籍などにこだわらない創作料理店も数多く、食の多彩性は世界屈指といえます。しかも、そのレベルの高さは定評があります。一例を挙げると、最近のミシュラン・ガイド東京編では、五十近くのフレンチ・レストランに星がつき、その大部分が日本人シェフの店です。

また、元来は外国料理であったものが、日本に入ってくると、日本化されるのも日本の食の特徴です。カレーライス、オムライス、トンカツ、アンパンなど、その例は限りがありません。ラーメンも今や日本の食となりました。和食に対して、「洋食」という言葉がありますが、その中には、日本化され、むしろ和食に分類した方がよいものも少なくありません。

家で、或いは、外食やテイクアウトで頂く日常食も、「おふくろの味」と言われる惣菜料理、どんぶり物、お茶漬け、おにぎり、のり巻等々、多種多様です。最近外国人の間で評判になっている弁当も、多彩な折詰弁当や、各地様々の「駅弁」など、食にこだわる日本ならではの現象です。

食に対する関心が高く、かつ、食の種類が多様なだけに、競争も激しく、食の質がどんどん向上していきます。その意味で、日本は、世界有数の、グルメの国です。そのグルメの国の食である和食が、食として世界の注目を集めることは当然のことです。

世界司厨士会議と日仏交流

二〇〇二年三月、京都で、第三十回世界司厨士会議が開催されました。これは、二年毎に、世界の一流シェフやホテル・レストランの調理責任者が一同に会する会議で、アジアでは初めての世界会議でした。当時、国立京都国際会館の館長を務めていた私は、日本司厨士協会と連携しながら、鋭意、誘致に努めました。京都こそ、開催にふさわしい場所と考えたからです。

短い五日間の会議でしたが、約五十ヶ国からの参加者は、例外なく日本の食文化に大きな関心を示し、和食や和菓子の視察や体験に励んでいました。会期中、五百人余りの各国シェフが、白いシェフ・コート姿で京都市内をパレードしたのが今なお印象に残っています。

この会議が一つの契機となって、京都の和食老舗を継ぐ若い人たちの間で、海外との交流推進の気運が盛り上がりました。そして二〇〇四年、京都国際会館で、NPO法人「日本料理アカデミー」が発足しました。活動として、まずは、グルメの国・フランスから若いシェフが京都に勉強に來たり、京都からフランスへ和食の指導に出かけることになりました。

通常、日仏交流というと、フランスから日本へという構図になりがちですが、この場合は、フランスの若いシェフが日本とフランスで日本の料理を研修するという、日本からフランスへの流れが主体でした。その後、交流は、フランスだけでなく、米国、英国、スペインなどの欧米諸国及びロシア、ブラジル、タイなどとの間でも行われています。これからも、和食についての海外との交流はさらに拡大していくと考えられ、日本側の対応の充実が期待されます。そして、このような海外との和食交流が盛り上がるなかで、和食を世界無形文化遺産にという動きが高まったわけです。

和食が世界無形文化遺産に

ユネスコ（国連教育科学文化機構）は、従来からの世界遺産に加えて、二〇〇三年、世界無形文化遺産の制度を創設しました。二〇一〇年には、イタリア、スペイン、ギリシャ、モロッコの地中海四ヶ国、フランス、メキシコの「食」が、食に関わる無形遺産として、初めて認定を受けました。

その前後から、京都を中心に、和食を無形文化遺産に、という動きが高まり、翌年、「日本人の伝統的な食文化―正月を例として」とのタイトルで、日本政府から申請が提出され、二〇一三年に和食が世界文化遺産に認定されました。

当初、申請対象としては、京都の懐石料理などが想定されていましたが、食の対象が一部の人に限定されるのではなく、より幅の広いものにする方がよいとの示唆があり、正月の例示が加わり、栄養バランスの良い健康的な食事構成という点が、併せて強調されることになったと仄聞そくぶんしています。かねてから、懐石料理などの食文化に思いをはせていた私は、一寸残念な気もしましたが、今では結果的にそれ



世界に誇る健康・長寿食

和食が健康食であることの評価は、現代でも、かなり以前から国際的に定着していました。六十年代後半、私は、ニューヨークに住んでいましたが、寿司、天ぷらをはじめとする和食ブームが既に始まっていた。低カロリー、低脂肪ということで、若い女性にも、年配層にも人気がありました。ラーメンも、醤油味、塩味、味噌味と三種類の選択肢があって、大流行でした。

最近、更に一歩進み、和食が長寿に資するということで、長寿メニューとか長寿弁当なども注目されるようになりました。日本は、自他ともに認める世界の長寿国ですが、それに日本の食が、深く関連していることは言うまでもありません。和食は長い間、米を主食、副食として、一汁三菜を基本的なパターンとしてきました。若布^{わかめ}や豆腐を具とする味噌汁、魚、野菜、豆類、海藻などの副食のとりあわせは、健康によく、栄養的にもバランスのとれたものです。

欧米や中国、韓国の食は、肉類が多いのが特徴ですが、和食は、相対的に肉類が少なく、魚、甲殻類、豆類などから蛋白質や脂肪を摂取します。肉食と長寿の関係については論争もあるようですが、農耕が発達し、海産物に恵まれ、狩猟が発達しなくても、栄養分の摂取に問題がなかったことが、結果的に日本が長寿国になる背景であったことは間違いないといえます。

伝統的な和食として挙げられる、精進料理や懐石料理も、健康食といわれています。前者は、お寺のお坊さんが肉や魚を断って精進することに由来したもので、禅宗と関係が深く、後者は、温石で腹を温め、空腹をしのぐことが語源で、茶道からきた言葉です。何れも、健康的な食であると同時に、食べ方や食べる作法を重視する料理としても知られています。

食文化としての和食

食文化ということをよく耳にします。特に、日本でよく使われます。食は全ての動物に必要不可欠ですが、食事となると、人間だけのものであり、食を調理するのも人間だけです。食事とか調理は、その

でよかったですと思っています。

この世界無形文化遺産認定を受けて、世界の和食への関心は大きく高まりました。各国のテレビ・雑誌などでも頻繁に取り上げあげられるようになりました。二〇一五年、ミラノで開催された「食」についての世界博では、日本館の人气が一番高く、連日、長蛇の列が続いたとのことでした。

健康によい和食、食文化として味わいの深い和食、それに加えて、日本人の食へのこだわりと関心の高さは、これからの日本の貴重な財産となっていくと思います。和食そのものが世界に広がり、和食が世界の食や調理に影響を与え、和食を通して、日本や日本人に対する理解が深まる、これは誠に嬉しく、素晴らしいことです。

土地の状況、風習、習慣、文化に密接に関連します。そういうことで、食がそれぞれの地域の文化の一部に位置づけられ、食文化という言葉が頻繁に使われるようになったのだと思います。

ただ、私は食文化という言葉をもう少し幅の広い、奥の深い言葉としてとらえたいと思っています。食材の選択、調理、味だけではなく、盛り付け、食器、部屋のしつらいや雰囲気なども含めた総合的なものとして食事を位置づけ、これを食文化という言葉で表現したいということです。

ミシユラン・ガイド・京都編が初めて出版された時、編集者が記者会見で、「すべては皿の上の勝負」と述べたとの報道が目にとまりました。その真意は必ずしも明らかではありませんが、最近のミシユランでは、味や料理だけでなく、店の雰囲気やサービスの質にも言及されています。

グルメの国・フランスでは、食事は楽しむためのものと言われています。働くために食べるのではなく、食事を楽しむために働く、というわけです。その場合の「楽しみ」には食べる楽しみだけでなく、人と一緒に食事を楽しむ共食、すなわち社交も含まれます。これも一つの食文化と言ってよいでしょう。日本の伝統的な食習慣には、懐石料理などのように、食事をする空間・時間それ自体が文化である、との位置づけがみられます。食事という機会、空間・時間を、如何に過ごすか、過ごしてもらうか、しつらえるかに趣向を凝らします。これがまさに食文化そのものであり、そういう幅の広さ、奥の深さが、無形文化遺産に和食が認定された背景にあったと思います。以下、和食について特記したい、いくつかの側面を説明していきます。

素材を活かす調理

京都で朝、御所近くの梨木神社に行くと、料亭の調理人が水汲みに来るのに出会います。日本の水は軟水で、和食の料理に適していますが、その付近の水質が特に良いと言われているからです。水ばかりではありません。新鮮でよい素材を如何に発掘・選択するかが和食の料理の出発点です。

欧米でも、アスパラガスなど、季節が重要な素材が多くありますが、和食ほど、季節や新鮮さを重視する料理は数少ないと思います。初鰹、鮎、松茸、筍など、日本では、季節や旬へのこだわりが、食べる人、調理する人の双方に強くみられるのです。

調理の方法として通常、煮る、焼く、揚げる、蒸す、の四種類が挙げられますが、和食では、その他、燻す、煎る、炒める、茹でる、炊くなど、多様な調理の仕方が採用されます。何れも、素材の味をできるだけ生かして調理することが求められます。煮炊きする、水炊き、しゃぶしゃぶ、おでんなどもそうですし、揚げる天ぷら、焼魚などもそうです。

逆説的になりますが、和食では、できるだけ調理を少なくするのが調理の秘訣と言われます。従って、和食では、刺身や寿司など、生で魚を食べることも多く、和える、卸す、浸すといった調理法も和食特有です。生ものが好まれるのも、新鮮面、衛生面での配慮が行き届き、安心感があるからです。

調理の技術も世界屈指といってもよく、特に、鱧の骨抜き、大根の千切り、薄切りにみられる、包丁捌きなどは、外国のシェフが見て、例外なく驚き感嘆します。一見、和食の調理は、寿司でも天ぷらでも、時間がかからず簡単に見えますが、職人として一人前になるには、何年も何十年もかかると言われています。

英語で「調理する」は COOK ですが、それは火にかけて調理するという意味です。和食では食材の切り方などを含め、材料の選択から調理のプロセスが重視され、調理方法も多岐にわたるのが特徴です。

和食の味、「旨み」の発見

味には、甘味、辛味、酸味、苦味の四種類があると言われてきましたが、最近、それに「旨み」が加わりました。旨みは、日本で発見されたもので、グルタミン酸がこれにあたります。旨みの例として、よく鰹節、昆布などの出汁だしが挙げられます。出汁は、牛や鶏の肉・骨などをベースとする欧米や中国の味付けと違って、旨みそのものの調味料、と言われています。

調味料についての考え方も、日本と欧米とはかなり違います。同じアジアではありますが、中国の味付けはむしろ欧米に近いと言えます。欧米の調味料である香辛料（スパイス）やソースは、素材の味をベースにして、新しい味を創りだすものです。味を創りだす点に着目して、欧米の調理は足し算の調理という人もいます。これに対して、和食の調理は、できるだけ素材の味を活かし無駄な味を取り除くということで、引き算の料理といえるでしょう。

醤油や味噌も、できるだけ素材の味を引き出し活かすという、主役ではなく脇役に徹する調味料です。塩、酢、砂糖、薬味なども同じような位置づけになります。欧米の料理などで、肉類に香辛料やブドウ酒を加え、何日もかけて、じっくり煮込むものがありますが、これなどは、和食とまさに対照的な調理といえます。

一般論として、和食は、味が薄く、淡泊だといわれます。もちろん、日本でも濃い味を好む人と薄味を好む人がいますし、地方によって味が違ってきます。濃い味か薄味か、どちらがよいかは好みの問題としか言えません。医学的には、薄味の方が健康に良いとする人が多いようです。

味に関連して、風味ということがよくいわれます。味とほぼ同意語であったり、味に香りを加えた意味に使われたりします。和食では、味覚とともに、香りも調理で重視されます。舌で味わう味覚と香りとが一体となる風味も和食の一つのポイントです。

盛り付け・食器へのこだわり

和食は、味、香りとともに、見た目、視覚を重視します。美しく、或いは、美味しそうに盛り付けることが大切です。近年フランスで普及しているヌーベルキュイジンヌ（新しい調理）では、盛り付けの重要性が強調されていますが、これは和食の影響によるものといわれています。盛り付けにあたっては、季節感も重要です。春は春らしく、秋は秋らしく、色々と趣向が凝らされます。正月のお節料理せちも盛り付けの美しさが求められますし、幕の内弁当なども色合わせが重要です。

食器の種類が多く、かつ、食器を数多く使うことも和食の特記事項です。食器の形、色彩、模様も様々です。一流の陶芸家の作である食器も日本では珍しくありません。この食器の多彩さは、外国の料理と比べて、和食の大きな特徴となっています。食事をしている、食器をみるのが、楽しみでもあり、また、嗜みたしなともなっているのです。

食器の使い方も様々で、通常、御飯は陶磁器の御飯茶碗で頂き、味噌汁や吸い物は漆塗りの木の椀で頂きます。御飯の盛り付けを「よそう」と言いますが、漢字で書くと「装う」となるのも何か意味があるように思われます。食器だけでなく、卓袱台ちゃぶだいも、言葉は中国語に由来しますが、日本独特のもので、団欒だんらんの食事によく合います。また、銘々膳なども、食を大切にする日本ならではの食卓といえましょう。箸は、東アジアに共通するものですが、和箸は、中国や韓国のもの比べ、やや長さが短く、御飯茶碗やお椀を左手で持ち上げ、右手で箸を持っていたくスタイルも日本独自のものです。食事の前後に「頂きます」と言って箸をとり、「ご馳走さま」と言って箸を置く所作にみられるように、和食には、随所に食を大切にしている草や言葉が見受けられます。因みに、「ご馳走さま」は、客人をもてなすのに、駆け走り回って準備することに由来する言葉で、食事への感謝の表現です。

「しつらい」と「もてなし」

「しつらい」も「もてなし」も日本的な表現です。漢字で書くと「設しつい」「持もて成なり」となりますが、やはり、平仮名で書かないと感じが伝わりません。どちらも、客を饗きやう応おうする際に重要なことです。饗きやう応おうは接遇と同じ意味ですが、饗の字に既に「食」が入っていることも興味あることです。世界各国とも、昔から客の接遇と食事は、密接に結びついています。日本では、特に食を供するにあたって、外見に現れた部屋などの「しつらい」と、内面的な客への心遣いや気配りのある「もてなし」が重視されます。部屋の「しつらい」や調度品は、豪華である必要はなく、けばけばしいものはむしろ排除されます。和の気配けはい、風情ふうせいの中で、和食を頂く、これが和の食文化の醍醐味です。床の間には、掛け軸が掛けられ、花が活けられます。花も一輪挿しなどのさりげないものが好まれます。さりげなさの中に奥深さのある、日本文化の象徴的な味わいがそこに具現ぐげんされるわけです。掛け軸も生け花も、季節に合わせ、客の好みなどを考えて選びます。これが、客をもてなす主人の出番であり、腕の見せどころなのです。

「もてなし」については、何れ別途、シリーズを執筆したいと思いますが、欧米のホスピタリティーが、自分が主体になって相手を歓待するという意味で、ホスト側に焦点があてられるのに対し、和の「おもてなし」は、常に相手を立て、相手の気持ちを察し、相手が満足し、喜ぶように対応するという点で、あくまで主体は相手です。ホスピタリティーと似た言葉で、サービス（奉仕）もあります。これも奉仕する人が主体になる表現です。ホスピタリティーもサービスも「もてなし」と同じ意味に使われることが多いですが、両者の間には主体の置き方という点で、基本的なニュアンスの相違があるというのが私の解釈です。

補足的に強調したいこと

以上が、和食について世界に発信したい諸点ですが、補足的に次の点を付け加えます。一つは、季節感です。日本は四季の移ろいを重視する国です。食も、その季節と密接に結びついています。食材の選択から、調理、食器、部屋のしつらいに到るまで、きめ細かく季節感を表し、これが和食の全体を通じての大きな特色となっています。

次に、日本はアジアの国として、アジア諸国と多くの特色を共有しています。しかし、食については、日本独自のユニークな点が多く、特に味付け、調理についてそう言えます。これが、和食が世界でユニークな食として注目されている由縁です。

また、和食は五感を大切にします。味覚はもちろんのこと、香りという嗅覚、舌触りという触覚、盛り付けなどの視覚、それに食事の際の静けさとか、虫の音など聴覚も例外ではありません。正に、五感を総動員する食事です。

更に、既に述べたように、食そのものに限らず、部屋のしつらいとか、おもてなしとか、食・食事に関わる全てのもが含まれる、総合的なものが、和の食文化になります。

私は、以前住んでいた、ニューヨーク、シドニー、ベルギーで、また、東京と京都で、食べ歩きに励みました。出張などで外国に出かけた時は、できるだけその土地の食事を体験するように心がけました。京都では特に、和食を中心しながら、色んなジャンルの食べ歩きをしました。

そういう経験を通して、和食について世界に発信する点が多いことと痛感しています。これからも、和食への関心は、ますます拡がり高まると思われれます。その際、和食そのものの普及とともに、和食の背後にある日本人の食に対する考え方についても、理解が深まればと思っています。

第三章 日本人の「住」(和室)

日本人と住——家になる

和服、和食に続き、日本の「住」として、和室を取り上げます。本来であれば、和の家ということ。「和家」となりますが、そういう言葉はないので平仄ひらびつを合わせる意味で「和室」にしました。家には、物理的に居住する場と、生活する場との二つの意味があります。英語では、HOUSEとHOMEの二語になります。いずれにしても、家は、食べて寝て生活をする場として大切な場です。居心地、住み心地、寝心地がよくなければなりません。

日本人が家を大切にすることを示す表現として「家になる」「部屋になる」があります。日本の家は高床式になっているので、物理的にも「家になる」になるわけですが、この表現には、家を大切にするという、象徴的な意味が込められています。家になるには、まず履物(靴)を脱ぎます。これも同じ趣旨で、清潔、衛生面でも望ましいことです。因みに、靴を脱いで家に入るといふ習慣は世界でもごく少数で、韓国、東南アジアの一部、アイスランドなどの北欧の一部だけにみられるものですが、最近はそのほかのところでも、外履きを脱いで部屋履きに履き替える習慣が増えてきているようです。戦後、日本が高度成長期に入って間もなく、EC委員会のレポートで、「日本人は兎小屋のような家に住み、仕事中毒のように働く」との趣旨の記述があり、これが話題になりました。確かに、一人当たりの平均居住面積という点では、日本の家は狭かったと言えます。ただ一つ、注釈を加えると、日本の家は、部屋が多目的に使用され、間仕切りも融通性があって、狭くとも住める、という点があったと思います。

この融通性以外にも、日本の家には、外部と遮断せずに自然と共生し、自然を取り込むという特徴や、

個室主義ではなく一家団欒^{だんらん}を重視する側面もあり、また、畳、縁側、床の間、布団、座布団など、世界でもユニークな特記事項も数多く、以下、順を追って説明していきます。

木造家屋の利点 —— 木の文化

日本の国土の六十八％は森林です。欧米が石の文化、中国が土の文化、アラブが砂の文化、と言われるのに対して、日本は木の文化の国、木造建築の国です。建築材にも松、杉、檜、檜、榎など、多岐にわたる木が、それぞれの特性を活かして使われます。日本の木造建築技術は、昔から世界の先端を歩み続け、外国の建築家が驚嘆する建物や建築技法が数多く残されています。

石や土と違って、木は生き物です。その特性は、建築材として使用された後も残ります。乾燥すると硬度や耐水度は樹齢の四倍になるそうです。従って、樹齢百年の木材は四百年持つわけです。木は軽く、しなやかであり、地震に強いのも木造建築の特徴です。問題は火災に弱いことですが、木造は、建替えや修復が比較的容易なことも、合わせて指摘されています。

日本は、モンスーン地域の北端に位置し、黒潮の関係もあって、湿気の高い地域です。従って、防寒や防暑も必要ですが、湿気対策が日本の家屋にとっての最大の課題です。揚げ床になっているのもそのためです。建築材としての木は湿気に強く、湿度が高いと水分を吸収し、低いと水分を放出します。従って日本の住居が木造基調なのも理由のあることなのです。

日本の木造家屋の基本は、柱と屋根とされていますが、屋根も、切妻^{きりづま}、寄棟^{よせむね}、入母屋造り^{いりもやづく}、など、何れも匂配^{のき}があり、排水や水捌け^はのための工夫が凝らされています。また廂^{しほひ}やモンスーン地域に共通する軒^{のき}も、雨よけ、日よけのためのものです。

石、煉瓦、コンクリートの家と比べて、木造家屋は、冷たさがなく、暖かさがあります。その意味で、人間味があるといつてよいでしょう。屋内は、木と紙が主流です。障子や襖^{ふすま}など、和紙の雰囲気も重要な役割を果たします。これは、石や土の壁と比較するとよく判ります。

木は、世界でも幅広く、建築、内装、家具に使われていますが、日本の木造家屋は、木の持ち味を、きめ細かく、フルに活用しているという意味で、世界の住居の中でも重要な一角を占めていると言えます。

外に開かれた住居

欧米などの外国の家が、どちらかというと自然を遮断し、外と隔離した形で、屋内の生活を重視する傾向が強いのに対して、日本の家は、自然とのつながりを重視し、外から内への連続性、すなわち、開かれた家を志向していると言えます。これは、気候が温暖であることも関連します。

外との境界である塀も、石やコンクリートではなく、生垣^{いけがき}が多いのも特色です。門を入ると敷石が並べられ、玄関^{げんかん}に続きます。町家や商家では門がなく、直接、外の通りに面する場合も多く、玄関（出入口）には、暖簾^{のれん}があるだけで、扉のない家も多くみられます。玄関に入ると土間^{どま}や三和土^{さんたき}があり、敷台（式台）で履物を脱いで部屋に上がります。その一連の流れには、外から内への連続性、外に向かっ

ての開放性が看取されます。

日本家屋の開放性を示すよい例が縁側です。縁側は、雨戸の内側か外側かで、樽縁と濡れ縁に分かれますが、樽縁は外廊下と同意語にも使われます。何れも日本独特のもので、部屋の延長にも、外廊下にも、また、人の出入り口にも、近所の人たちとの出合いの場にも、夏には、日光浴のサンルームにもなるという、多目的な、内と外とを結ぶ場です。欧米の家にも、テラスやベランダがありますが、外との接点という意味では縁側にはかきません、

壁の少ないことも日本家屋の特徴といえます。近年は、プライバシー確保の点から壁が増えてきていますが、外との結びつきという点からは、やはり雨戸、ガラス戸、格子戸が基調になります。何れも、開閉は左右へのスライド式が大部分で、収納も狭いスペースで納まり、それだけ外との接点が広くなります。雨戸は降雨時のみに閉めるということでそう名付けられたのでしょうか。戸締りは一寸大変かもしれませんが、夜に戸を開けて、月や星空を部屋全体から眺められるのも、木造家屋ならではの事です。

自然を身近に取り入れる



外との連続性に加えて、自然をより積極的に取り入れることも、日本家屋の特色です。日本は湿気が多いので、換気、通風が極めて重要です。風通しがよくなければなりません。また、夏は日差しが強く、日除けが必要な時もありますが、同時に、採光も重要なポイントです。なお、外に開かれた住居だけに、自然を積極的に取り入れつつ、他方では、安全面に配慮するなど、バランスをうまくとっていくことが肝要となります。

壁に代わる日本家屋の特色は、いうまでもなく、障子と襖です。両者とも簡単に開閉できて、外気をフルに取り入れられます。障子は、和紙を通して、日射し除けにも採光にもなります。和紙はまた、光を拡散する作用があるので、閉めていても、部屋全体に適度の明るさが確保できます。襖は、格子状の枠に貼られた紙と紙との間に空気の層があつて、これがクッションとなり、室内を、夏は涼しく、冬は暖かく保ってくれます。

更に、多湿で暑い夏には、障子、襖を取り外して、網戸や簾に替え、風通しをよくし、日差しを遮ります。何れも、内からは外が見えますが、外からは中が見えにくく、目隠しにも景観にもよいものです。衣替えとともに、季節による建具・家具替えも、他にはあまりみられない、ユニークな日本の習慣です。

その他、天井と鴨居の間にある欄間、屋根の一部をあけた天窓なども、採光と通風のための工夫であり、坪庭も、奥行き長い日本家屋では、同様に重要な役割を果たします。

採光と換気に限らず、自然を屋内に積極的に取り入れ、自然を身近に感じることが、国土が狭く、敷地、屋内スペースに限界のある日本の家にとっては重要なことです。狭くとも庭をとということで、坪庭もそうですし、活け花、盆栽、箱庭なども、自然を身近に置くとの発想からのものです。このように自

然を身近に置くという、自然との共生は、日本文化、日本人の考え方の基本の一つと位置づけられます。

融通無碍の部屋割り・間仕切り

日本家屋の部屋は、使用目的が複数に兼用でき、使用が弾力的で融通無碍です。一つの部屋が、寝室にも居間にも客間にも勉強部屋にもなる、という具合です。もちろん、食事は何処で、勉強は何処で、寝室は何処でと、一応の部屋割りが決まっている家が大部分ですが、状況によって、臨機応変に、部屋の使い方を変えることができます。

これには、家具の可動性が大前提となります。布団、座布団、仕事・勉強机、卓袱台、座椅子などの家具を片付けて、収納したり、別の部屋に移せるから、できることです。家具の中には、固定のものもありますが、布団を始め、座卓、座椅子など、坐る生活パターンでは、比較的容易に動かせる家具が大部分です。それぞれの部屋が一日中、一つの使用目的に使われるわけではないので、この多目的な部屋の活用は、移動の時間暇や片づけの面倒さはありませんが、合理的、効果的であり、便利でもあります。家具だけでなく、障子や襖などの建具を取り払って、部屋の仕切りを外し、一つの大きな部屋として使うことも可能です。更に、部屋の中に、屏風や衝立を置いて、パーティションとして仕切ることもできます。このように、日本の住居は、使用形態が弾力的、多角的で、家の広さが狭く部屋数が少なくとも対応できる、という利点があります。

布団、家具などの収納も、押し入れという、間口、奥行きのある収納部分が各部屋についていることが多く、また、固定家具として、衣類などを収納する箆笥も、かつては嫁入り道具の一つとされるなど、日常の生活に必要なものの収納には、それなりの配慮が払われてきました。

畳の上の生活——布団と座布団

畳は、日本独特のもので、他に類のないものです。藁を固めた畳床に、イグサで編んだ畳表を縫い付けたもので、断熱性、保温性、吸湿性、クッション性に富み、転んでも痛くなく、寝そべっても心地よく、畳の上の生活は、板間や土間とは全く違った感触のもので、畳の厚さは5〜6センチあり、板張りの床の上に絨毯やカーペットを敷くのと違います。

畳の上に机やテーブルを置いて、椅子に坐る家もよくみかけますが、畳の上の生活の基本は、やはり床坐です。同じ「坐る」といっても、椅子に坐るのと、畳に坐るのでは、かなり違います。一見、椅子に坐る方が簡単で楽にみえますが、床坐の方が安定しており、坐る、立ち上がるという動きも含めて、健康にもよいという人もいます。食事も、仕事や勉強も、畳の上に座布団を敷いて坐る方を好む人も少なくありません。椅子坐か床坐かは、各人の好みや家の習慣・構造で決まりますが、床坐の場合には、どこに坐るか、どのように坐るかを含めて、選択の範囲が広くなります。

畳の上に布団を敷いて寝るか、ベッドで寝るかも、各人の選択の問題ですが、布団の方が寝心地がよく、敷布団のうえに掛け布団をかけて寝ると、ぐっすり寝られるとういう人もかなり多いようです。特に冬は、布団の中が木綿綿で、保湿性・弾力性・吸湿性に富み、暖かくて好評です。

外国人が日本に住み、日本の生活に慣れて日本化することを、フランス語の動詞で「TATAMIZER」と言い、辞書にも載っていますが、これは正に、畳の上の生活に慣れることに由来する言葉です。

「くつろぎ」と「だんらん」

生活の場としての住居で、大切なのは「くつろぎ」(寛ぎ)と「だんらん」(団欒)です。寝食を含めて、毎日かなりの時間を家で過ごす訳ですから、家での居心地がよく、寛げ、リラックスできることが重要です。

外で仕事し、勉強する人が、家に戻ったら気楽に過ごしたいと思うのは当然です。仕事場や学校で長時間、椅子に坐って仕事や勉強をする人にとって、家では畳で寛ぎたいと思うこともうなずけます。畳に坐るという場合に、正座でも、胡坐でも、足を投げ出しても、或いは寝そべってもよいというものも、床坐の利点です。ソファは、椅子と比べると、寛ぎの度合いは大きいと思いますが、やはり畳の方が雰囲気的にも寛ぎやすいようです。石やコンクリートの家よりも木造家屋の方が心理的にリラックスできるとする人も多いです。

家で一緒に生活する人が集まって、団欒の場を持つことも重要です。友人や客人を招いての集まりもそうですが、特に家族や同じ家に住む人が、その絆を深める機会となるからです。その際、卓袱台(ちゃぶだい)での食事や、畳の上での車座は、団欒に適しています。冬の囲炉裏や炬燵は、正に和の住居ならではの格別な「しつらい」です。欧米の暖炉は壁側にあって部屋を温めるもので、団欒という点では、囲炉裏、炬燵にかないません。最近は欧米でも、クッションなどを利用しながら、椅子に坐らずに、絨毯などの敷物の上での床坐を好む人が、増えているとの話も聞きます。

団欒が重要であるといっても、常に団欒しているわけではなく、一人で居ることも必要です。ただし、個室主義ということで、家族や子供の人数だけ個室を用意するとの考えが、一般化したことがあります。個室に閉じ籠ってパソコンやゲームに熱中する人もいます。個室が自主性、自立性を育てるのによいとは限りません。むしろ、家族や子供が一室で一緒に仕事や勉強するのもよいのではないのでしょうか。何れにしても和の住居では、それぞれの部屋が、個室としても何人かが一緒に居てもよい、という意味で、融通性に富む活用が可能なのです。

素朴でこだわりの室内設営

日本の家は、装飾、調度品、置物、絵画などが少なく、控え目なものも特徴です。全体として色彩も地味で、素朴な佇まいであり、屋内のしつらい・設営も簡素です。ただし、その簡素さのうちに、さりげなく、細部にわたるこだわりが看取され、これが日本の家の持ち味となっています。これを、私は外国人に説明するとき、「洗練された素朴さ」、「refined simplicity」と表現してきました。

日本の家屋の中心は床の間です。床の間は、接客などに使う、中心的な部屋の入り込み部分で、畳より一段高く、正面の壁には、通常、掛け軸が掛けられ、その前に活け花が置かれます。掛け軸は、水墨画などの書画が多く、活け花は、一輪挿しのようなさりげないものが普通です。床の間の隣には、同じ

く入れ込み部分に、違い棚といって、上下二段に組み合わされた棚が設けられ、そこに置物などの美術品が置かれます。掛け軸、活け花、置物などは、来客やTPOに応じて頻繁に替えられます。この床の間と違い棚が、日本家屋では唯一の展示・装飾スペースになることが多いようです。

壁も、一色に塗られたままの状態で、障子も、白い和紙が貼られたまま、絵も模様もありません。襖も、一般の家庭では、唐紙からかみのような模様はありますが、襖絵はありません。内装は、けばけばしくなく、すっきりしていて、掛物や置物も少数厳選主義です。しかしながら、欄間、柱の継ぎ目の釘隠し、襖の引手など、さりげない部分に芸の細かい趣向が凝らされます。ヨーロッパのオール・ヌーボーと一脈相通ずるものがありますが、そちらがむしろ日本の影響を受けたとの説もあります。部屋の上つらいとして、活け花、植木鉢、金魚鉢、風鈴など、狭い空間を活用して、自然を身近に、という工夫が随所にみられます。

最近の集合住居などで、床の間が少なくなったのは残念ですが、限られたスペースの中で、自然との関わりを確保し、装飾や部屋のしつらいに、さりげないこだわりを示す、これが日本の住の魅力です。

風呂好きの日本人

日本人の風呂好きは定評があります。比較的狭い家でも通常、湯槽ゆぶね(バス・タブ)と洗い場のある風呂場があります。「風呂に入る」は、英語ではtake a bathですが、日本語では「入る」です。まず身体を洗ってから湯槽に入り、身体を温め、そのうえで、洗い場ですっきり身体を洗い、再び湯槽に入るわけで、衛生的でもあり、清潔でもあります。小さな子供が親と一緒に風呂に入るのも、親子の絆を深めます。

湯槽は、かつては檜風呂など、木の湯槽でしたが、最近はタイル張りのものが増えて、欧米のバス・タブのように、一人が入る毎に湯を入れ替えるスタイルも多くなっているようです。日本を訪れた外国人の印象記には、日本人は清潔感に富み、風呂好きで毎日風呂に入るという点が、古い時代から言及されています。

同時に、日本人にとって、風呂は、一日の疲れを取り、寛ぎ、リラックスする貴重な時間であり空間でもあります。正に「癒しいやし」の場として、一日のスケジュールが終わって、就寝前、ゆっくりと比較的長く、風呂に入る人が多いようです。

風呂好きの日本人は、温泉好きでもあります。古くから日本各地に温泉が発達し、公家、武士、庶民の憩いや癒しの場となっていました。現在も、湯治としての治療・療養だけでなく、休養、癒しのため、多くの老若男女が温泉を訪れています。最近では、外国人の間でも温泉ブームが広まっています。日本を訪れ、景色を眺めながらゆっくりと温泉に入りたいと言う人も増え、外国人を案内するのに温泉を含めるといふ日本人も多くなっています。確かに、入浴は、身体を清潔にし、清めるばかりでなく、憩い、癒しの場としても、重要な意味合いがあると言つてよいと思います。

和の住居―和室の勧め

住については、和風よりも洋風を好む人の方が、数のうえでは多いようです。確かに洋風の家は機能的で便利な点が多く、セキユリテイの面でも安心して住めます。しかし、和風住宅にも、自然との関わり、融通性、効率性など、利点や魅力も少なくありません。

私は、大学を卒業して英国に留学する機会がありました。英国の大学生活が学ぶ場だけでなく、生活の場であるという点が印象深く、学生寮が一人二部屋で、机、椅子の他にソファもあるのに驚きました。また、英国の家庭を訪問して、家具、調度品を含め、住居の奥の深さを感じました。そして、五年の年月を経て、京都に住み、京都の人々の暮らしぶりや生活に触れ、和の住居にも、よさと魅力を改めて感ずるようになりました。最近では、外国人で、京の町家に住みたいと言う人が増えているという話も聞きます。

一時、集合住宅など、洋風の住居で、一室を和室にするということが流行りました。日本人の生活は、これからも、衣食住の何れもが、和洋折衷というか、和と洋との二重構造で、推移していくと思います。その中で、ともすると和の部分が少なくなっていく住の面で、少なくとも一室は和室にして、和の利点を享受できるようにしては如何でしょうか。

セキユリテイの面、冷暖房の面などで、設備が発達すると、これまで和の住居の問題点とされていたことも解決されていくと思われまます。欧米の家でも、冷暖房が発達すると、寛ぎと団欒が得られるよう、床坐がますます普及するでしょう。自然との繋がり、家具の可動性、部屋の多目的使用といった、和の住居の利点が、欧米の住居でも今後の検討課題になると思います。このように、和の住居、和室も、和服、和食と同様、世界に発信できる点が少なくありません。

……………日本語……………

日本語は、世界の言語の中でも極めてユニークな言語です。表意文字と二種類の表音文字を組み合わせ、併用するというのは他に類がありません。その他にも特記すべき特徴が数多くあります。また、日本語は感性重視の言語とも言われ、また、気配りの言語とも、関係重視、状況重視の言語ともいわれます。第四章と第五章では、日本語を取り上げ、その多岐にわたる特徴を明らかにしたいと思います。

第四章 日本語（そのⅠ）―世界に類のない言語

日本語はユニークな言語

日本語は、世界の言語の中でも、極めてユニークな言語です。漢字という表意文字と片仮名・平仮名

という音声文字が組み合わされ、その三種類を併用するというのは、他に類がありません。世界には数千の言語があるといわれています。その中で日本語は、異なる文字の併用という点の他にも、特記すべき特徴を数多く有し、世界の言語学者の注目を集めています。しかも、日本語は、一億二千万人の日本人が日常使っている、世界でも十指に入る言語であり、最近の調査で約四百万の外国人が勉強している、世界の主要言語の一つなのです。

日本語は、ユニークであるだけでなく、複雑で、難しいともいわれます。確かに文字の数が多く、通常の漢和辞典でも数万の文字が収録されています。日常使う当用漢字も一八五〇字あります。それに、字画数の多い、難しい字が多数あるのも漢字の特徴です。しかし他方、単語 (Word) という点でみると、漢字の単語の方が、アルファベットで綴る英語などの単語より、ずっとスペースの節約になります。漢字と仮名との複合言語ということも、複雑ではありませんが、一見して何が書いてあるかが判り易い、という利点もあります。ということで、日本語は、効率的で、早く読める言語といわれています。

日本語は難しいかとの問いに、易しいと答える人は少ないでしょう。しかし、難しい音声が比較的小なく、母音と子音が交互になっていて発音はし易く、文法も難しくないとわれています。その点に着目して、日本語は、会話は易しいという人もいます。日本に滞在する外国人が、短期間で流暢に日本語を話すのに出逢い、驚くことも少なくありません。

以上、例示的に日本語の難易に言及しましたが、引き続き、日本語について、言語として注目すべき特徴を説明します。

日本語の成り立ち

言語は通常、一種類の文字で成り立っています。外国語の文字が引用されることはありますが、それはあくまで外国語としての引用です。それに対して、日本語は漢字、片仮名、平仮名の三種類の文字の併用です。お隣の韓国で漢字とハングル文字が併用された時代がありました。近年ハングル文字に統一されました。従って、複数の文字の併用は、世界で今や、日本だけとなりました。

四世紀から五世紀ごろ、漢字が中国から日本に伝来した時、日本には、話し言葉だけで、文字はなかったとされています。文字としての漢字が輸入されましたが、その読み方は、漢字本来の読み方に由来する「音読み」に、日本古来からあった日本語が「訓読み」としてつけ加わりました。一例をあげれば、「犬」の音読みは「ケン」訓読みは「イヌ」という具合です。

同時に「イヌ」という発音に漢字をあてはめ、「イ」を「伊」ないし「以」と、「ヌ」を「奴」という漢字で書き表しました。これが「万葉仮名」と言われるものです。そして、それが更に、万葉仮名の一部をとって、片仮名(カタカナ)になり、万葉仮名をくずして書いて、平仮名(ひらがな)となったのです。すなわち、片仮名の「イ」は「伊」から、平仮名の「い」は「以」から生まれたものです。

当初、片仮名は主に男性が、平仮名は主に女性が使用し、平仮名は一時、女手といわれました。それが次第に、漢字と仮名の「交り文」、すなわち混合文が一般的になり、その混合文が長い間、日本語として定着し現在に到っているのです。なお、古来の日本語の由来については、諸説あって定かではありません。いささか端折り気味ですが、これが日本語の成り立ちの要約です。

漢字の伝来にあたって、音読みと訓読みの二通りの読み方を生み出し、加えて、片仮名と平仮名という二つの仮名文字を創出し、これを併用して、独特の日本語を形成した、先人の知恵と創造力は誠に感嘆に値します。漢字という表意文字と、五十音図というユニークな表音文字を組み合わせたことも、言語学的に極めて興味深いものです。なお、「アイウエオ」の五十音図も表音文字として高い評価を得ています。

漢字と平仮名・片仮名

漢字は、字画数の多い難しい文字が多く、中国でも日本でも、次第に簡略化され、変遷を重ねてきました。特に近年、お膝元の中国では、大幅な簡略化が進み、従来の漢字からは類推できないようなものも含め、かなり多くの文字が変わりました。中には、もはや表意文字とはいえないようなものもみられます。そこで今では、伝統的な漢字が残存し、実際に日常使われているのは、漢字の名家である中国よりは、むしろ日本とも言われています。漢字研究や中国古典の研究でも、日本が注目されています。更に、日本では、中国伝来の漢字に加え、日本で作られた漢字(国字とも言われます)も出てきました。例えば、「峠」とか「榊」とかがその例です。

読み方も、訓読みはもちろんですが、音読みも実際の中国の読み方とは違っていています。しかも、それぞれ複数の読み方がある文字が多く、一つの単語で、音読みと訓読みが混在する、いわゆる「重箱読み」も少なくありません。このように、漢字は、発生的には中国文字ですが、読み方を含め、日本では、自由自在に適応・発展し、日本語として定着しました。同じ漢字を使っても、日本と中国とでは、発音だけでなく、意味も違う場合もできて、それが却って誤解の原因になったりします。それでも、日本人が中国語を見て、或いは中国人が日本語を見て、ある程度意味が類推できるという意味合いは大きいと思います。

現在の日本語は、漢字と平仮名の混合文が一般的です。片仮名の使い方は色々ありますが、外来語を引用する時、その外来語の発音を片仮名で表記します。これも、仮名が表音文字で、複数文字を併用するからこそできることで、日本語の大きな知恵と言えます。文中に片仮名があると一見して外国語ではないかと推察でき、便利な片仮名の活用方法です。最近では、外国の人名や地名だけでなく、外国語の名詞、形容詞、動詞などが沢山、しかも続けて、片仮名で書かれている文章や広告をよく見かけますが、折角の日本語の持ち味や利点が失われる場合も多く、行き過ぎは残念な気がします。

豊富な語彙と同音異義語

漢字は、一字の単語もありますが、二字以上の文字からなる単語も膨大で、かつ、四字熟語のように、複数の単語が合成されてできる合成語も無数にあります。ドイツ語も合成語の多い言葉ですが、漢字は更にその上をいくでしょう。それに日本語は仮名が加わるわけですから、日本語の語彙の豊富さは正に世界有数といってよいと思います。

漢字の読み方も、日本では、音読み、訓読みのそれぞれに複数の読み方がある文字が多数あり、文字

や単語が多いだけでなく、読み方にも注意しなければなりません。そこで、漢字に振り仮名をつけることとがしばしばみられます。この振り仮名も、世界に類のない、日本語特有の工夫で、漢字と仮名の複合言語だからできることです。

一つの文字、単語に複数の読み方があるのとは逆に、同じ発音の異なる文字や単語が多いことも日本語の特徴です。このような同音異義語には、例えば「橋」「箸」「端」のように、アクセントの置き方が違う場合もありますが、「科学」「化学」のように、文脈で判断するか、文字をみないとわからない場合も少なくありません。

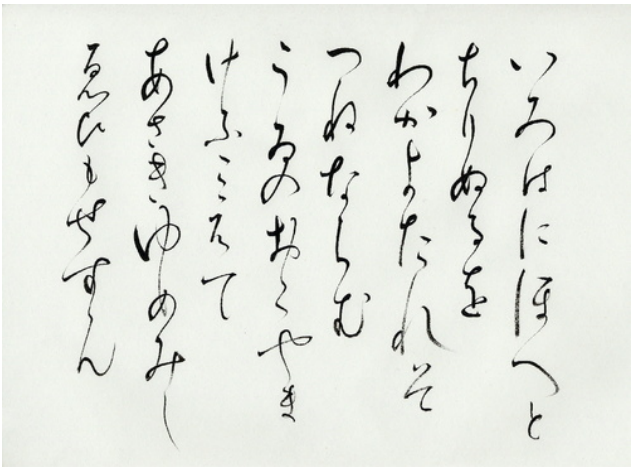
同音異義語が多い例として、よく引用される「貴社の記者が汽車で帰社」などは日本語の複雑さをよく示しています。日本語のジョークも、この同音異義に基づくものが多く、「胃炎なんて言えん」「糖分は当分だめ」「一枚でもせんべい・一つでもまんじゅう」などは、どれも日本語の判らない人には通じないジョークです。国語辞典に、ジョークを漢字で「冗句」と書いてあるのを見つけ、なかなか洒落たジョークだと思いました。同音異義語だけでなく同じ発音で同じような意味を持つ、同音類語も多く、日本語はなかなか大変です。

日本語は音声語か文字語か

言語には、文字中心の言語と音声中心の言語との二種類があると言われます。通常は、表意文字が文字中心で、表音文字が音声中心になるわけです。日本語は両者の複合言語なので、双方の特色を有します。大和言葉やまとことばと言われる日本古来の言葉には、含蓄がんちくがあり美しい響きで、語感の素晴らしい言葉が沢山あります。この点については改めて触れたいと思います。俳句や和歌なども、リズムと抑揚に富み、音声で聴き味わう、世界に誇る定型詩です。その意味で、日本語は音声語とする説も有力です。

他方、漢字と仮名の混合言語である日本語は、見て読み易く、見て判り易く、速読に適する、効率的な言語といわれます。一つの漢字が表意文字として意味を持ち、印象に残ります。その意味では、日本語は、基本的に、眼で見て読む、文字中心の言語と言ってよいのかも知れません。日本語の文章は、キーワードが目立ち、見て美しいとする意見も、言語学者の中に多くみられます。

文字の美しさという点で、世界で一番美しい文字は、草書体で書く平仮名、とする外国の学者もいます。特に、毛筆で書く平仮名の草書体は、日本人にも読みにくいですが、意味が判らなくても、一つの画をみているようで、美しいものです。外国でも、ペンマンシップとかカリグラフィーと言って、文字を美しく書く技法



法がありますが、日本や中国の書道は、それとは違います。

書道は、単に文字を美しく書くというだけではなく、日本では、絵画と同じように、芸術と位置づけられ、掛け軸や額に入れ、室内の装飾とします。精神を落ち着かせるために仏教経典を毛筆で書き写す

写経も流行っています。最近、毛筆による習字が学校教育で少なくなっているとの話もありますが、書道が、多くの日本人にとって、身近になることが望まれます。

発音と文法は比較的簡単

難しいと言われる日本語ですが、発音は比較的易しいとされています。他の言語と比べて、難しい発音が少ないのです。綴字の中に入っているながら発音しない文字もなく、フランス語のリエゾンのように、二つの単語で、前の単語の語尾と次の単語の始めの文字が結びついてしまう発音もあります。日本語は、殆どの場合、子音と母音が結びついて一音節になり、単語が母音で終わることが多く、発音が容易です。外国語には、英語のRとLのように、日本人にとって発音の区別がしにくいものや、子音がいくつも続いてどう発音してよいか判りにくいものが、多数あります。

文法も比較的簡単です。人称代名詞の格の変化もなく、時、性、数による動詞の語尾の変化も、日本語は少ないと言えます。また、定冠詞や不定冠詞はありません。普通名詞に、フランス語のように男性名詞、女性名詞があり、または、ドイツ語のように男性名詞、女性名詞、中性名詞の三種類があつて、それぞれ冠詞が違うことなども、日本語では考えられないことです。「鼻」は、フランス語では男性名詞、ドイツ語では女性名詞、フランス語の国名で、フランスは女性名詞、日本は男性名詞というようなことも、外国語の場合は覚えなければなりません。

日本語はその点、名詞、動詞についての文法上の規則や変化が少なく、楽です。「てにをは」という助詞を活用して、名詞の格付けを示し、名詞自体の変化は、なしで済ませています。他方、主語が省略されて、文脈で判断しなければならぬこともあり、曖昧さが残る面もありますが、全体としては融通性に富み、実用を重視する言語といえるのではないのでしょうか。

文法には直接関係ありませんが、日本語は縦書きでも横書きでも書けるといいうのも、他の言語にはあまりみられないことです。伝統的には縦書きですが、横書きも、明治以降取り入れられ、戦後は、縦書きと並んで、一般的となりました。これも日本語の融通性の一例といえましょう。

主語の位置づけ・主題の重視

英語などの欧米の言語は、主語と述語が基本的な軸として、成り立っています。日本語もそうですが、主語がよく省略されます。東南アジアの言語にも、よく主語の省略がみられます。その点で、主語を重視し、自分と相手と第三者をはつきり区別する、欧米の言語と違います。主語が省略されても前後の関係で主語が判れば、それでよいというわけです。更に進んで、主語が省略された方が、文章がソフトになつてよい場合もある、という人もいます。

主語の省略だけでなく、主語が物であつたり、自然現象であつたりするのも、日本語の特色です。「戸が閉まる」「雨が降る」などが、その例です。戸は、普通、人が閉めるものなので、英文では、「戸」が主語になる場合は受身形になります。「戸が閉まる」という方が状況描写として適当な場合も多いと思います。「雨」の場合は、英語では、*It rains* のように *It* という形式主語を立てますが、「雨が降る」

という日本語の方が自然な感じですが。何れも、人間中心の言語との違いかも知れません。

日本語の場合は、主語よりも主題、テーマを重視し、現象や状況設定を優先して表現するのです。よく引用される例として「象は鼻が長い」という文章がありますが、その場合「象」は主題で、「鼻」が主語と説明されます。象がテーマで、まず先にきて、次に象の説明になるわけです。その意味で、日本語は主語―述語という流れでなく、テーマが優先し、その次にそのテーマの説明がくるのが通常です。「僕は、洋食だ」「あの店は美味^{おい}しい」「電車が参ります」などは、文法的には明らかに誤りですが、文章としては簡潔で、それなりに理解できます。まず文法ありきではなく、かつ、その文法も、各言語に共通するのではなく、それぞれの言語に妥当する文法があつてよいと、私は思います。

日本式外国語の取り入れ

日本と外国との交流の歴史は古く、当初から中国文化の伝来が続ききました。その後、キリスト教宣教師の渡来などから西欧との接触が始まりました。鎖国による中断はありましたが、明治維新以降、再び西欧文明の摂取が盛んになりました。この外国との交流を通じての大きな特色は、外国の文物をそのまま取り入れるのではなく、選択的に、かつ、それらを日本の土壌に適合させ・消化したうえで摂取する、ということですが。漢字の伝来の時の対応も正にその通りでした。

欧米の言語の摂取の際の対応も、漢字の時と同様、日本独自の取り入れ方が随所にみられます。例えば、アルバイト（ドイツ語では「仕事・労働」）、アパート（英語では「離れて」という副詞）などのように、日本独自の意味が定着したり、ワイシャツ（ホワイト・シャツ）、ズボン（ジューボン）など日本独自の発音と意味にしたり、ロマンス・カー、レイン・シューズ、ニュー・フェイスなど、なかなか味のある和製英語にも出会います。パソコン、マザコン、リモコン、ゼネコン、エアコンなど、英国人や米国人がどの程度想像がつくか、尋ねてみたいものです。

外国語の取り入れではありませんが、日本と外国との交流で特記すべきは翻訳です。日本程、翻訳が発達し、外国の文物を自国語に翻訳して取り入れた国は少ないと思います、翻訳文化という言葉があり、日本語に翻訳された詩や小説が、原文と同様に、文学として評価されるのも珍しいことです。

また、論語などの中国の古典に返り点を付して、日本語読みにし、「漢文」として、中等教育の「国語」の授業で学習するのも、日本ならではの現象といえるでしょう。

第五章 日本語（そのⅡ）―感性重視の言語

日本語は感性重視の言語

言語は、人間の感情を表現し、人間の考えを表現します。従って、どの言語も、感性と論理の双方に関わります。それでも、その言語を使う人々の文化的、歴史的背景などによって、相対的ではありませんが、論理表現に強い言語と感性表現に強い言語が出てきます。欧米の言語は、一般論として論理的と言われていますが、同じ欧米の言語でも、ドイツ語は論理的で、ラテン系の言語は感性表現にたけている

とされています。

日本語についても、色々と議論はあるようですが、日本語は感性表現に強い言語とする人の方が多いようです。私もそう思います。感情表現が直截的で、擬音・擬態語が多く、状況描写が、客観的な説明調というより、自らが実際に見聞きして感じたことをそのまま表現する傾向が強いです。また、日本語は、敬語とか婉曲話法のように、同じことを表現する場合でも、状況や相手によって、表現や言葉を変えることが多く、その変え方も多岐にわたります。これも、日本語が感性重視である一つの表れと言えます。

日本語が文字語であるか音声語であるかについては、前述しましたが、何れであっても、読み書きする言葉と話す言葉はかなり違います。漢字を文字としてとり入れた時、仮名と訓読みによって、言文一致を見事に実現したわけですが、その後は文語、口語といわれるように、書く文章と話す言葉が違ってきています。しかし、それでも、文語、口語の双方が感性重視の言語であることには変わりありません。俳句と和歌は日本特有の文学ですが、詠まれる日本語は、正に感性そのものの表現です。特に、俳句は、体言止めなどを活用しながら、十七文字という少ない語数で余韻を醸し出し、世界でも類のない、短い詩歌として注目されています。

擬音語・擬態語は世界一

擬音語・擬態語の豊富さは、日本語の大きな特色です。擬音語は、耳に聞こえたとおりの音を言葉にしたもの（例示としては、「ワンワン」は、犬の鳴き声、「ザーザー」は雨の降る音）です。擬態語は、聴覚以外の感覚印象を言葉で表現したもの（例示としては「にやにや」は笑う様子、「べたべた」は粘りつく状態）です。擬音語は、普通は片仮名で書くことが多く、擬態語は、平仮名で書くことが比較的多いようですが、そうでない場合も沢山あります。

擬音語（英語でオノマトペア、フランス語ではオノマトペ）は、殆どの言語にみられますが、その多彩さでは日本語に敵うものはありません。擬音語の例として、動物の鳴き声がよく引用されますが、同じ鳴き声である筈のものが、言語によって、かなりの違いがあるのも、興味があります。（例えば、鶏の鳴き声は日本語でコケッコッコ、英語で *cock-a-doo-dee-doo*）。また、日本語では、「泣く」を「ワーワー、シクシク、エーンエン」と擬音語を付して、状況を示すのに対し、英語は *sob, cry, weep, blubber, whimper* など、それぞれ別の動詞で「泣く」状態を示します。

擬態語は、外国語ではそれほど多くなく、正に日本語の独壇場です。特に、「うきうき、くよくよ、いらいら、やきもき、のほほん、しんみり、むしゃくしゃ」など人の心の様子を示すものは、他の言語の追従を許しません。人の動作を表す「おろおろ、てきぱき、きよろきよろ、しゃなりしゃなり」なども、日本語ならではの、感性を示す言葉です。外国人に日本語の擬音語、擬態語を聞いて貰い、その反応を質ねるのも興味あることです。

擬音語も擬態語も、同じ音節の繰り返しが多いですが、そうでないものも多数あります。また、医者に「痛い」を説明する時、「ひりひり、ちくちく、じんじん、ぴりぴり、ずきんずきん」などと言えば、日本の医者はずぐ状態が判断でき、便利です。これを外国語で説明しようとしても適当な言葉が見当た

らず、大変苦勞するという話をよく聞きます。

五感に関わる表現の豊かさ

感性を重視する日本語のもう一つの特徴は、五感に関わる表現の豊かさです。他の言語でも、身体の部分に関わる表現は多数ありますが、日本語では、身体的部位そのものに着目した表現より、身体部位に関わる感覚、すなわち五感に由来する表現が多いのが特徴です。五感とは、視覚(目)、聴覚(耳)、嗅覚(鼻)、味覚(口舌)触覚(手肌)ですが、頭、顔、胸、腹、腰、足などに関わる表現も含まれます。

これも、自らの身体で感じたものを、そのまま表現するという意味で、擬音・擬態語と同様、直接的な感覚表現です。身体感覚、皮膚感覚といってもよいかも知れません。五感に関わる表現は多数にのぼり、例示を選ぶのに苦労しますが、それぞれにつき、いくつかを挙げてみます。「目を皿にする」「目玉が飛び出る」「目が肥える」「目が散る」「耳が痛い」「耳に入れる」「耳が疑う」「小耳に挟む」、鼻が利く「鼻に付く」「鼻で笑う」「鼻を明かす」「口酸っぱく」「口が堅い」「舌の根が乾かぬうち」「二枚舌」「手が焼ける」「手を抜く」「手厚い」「肌が合う」など、なかなか「味」のあるものが多数あります。その他の部位についても、「頭を悩ます」「顔が広い」「胸を痛める」「腹が立つ」「肝に銘じる」「腰が砕ける」「足を洗う」など、例示に事欠きません。

身体感覚に関わる表現は、感覚表現の中でも、最も直感的なものです。日本人は感覚を重視し、直観を重んじます。その意味でも、日本語は論理的思考よりも、感性を重視する言語と言えます。風や虫の鳴き声など、ごく普通の自然現象に着目して、「虫の音」「鳥の囀り」「風の便り」といった「風情」のある言葉を創り出します。匂いについても、日本人は敏感で、「移り香」「聞香」なども含蓄のある言葉です。

美しく含蓄のある大和言葉

大和言葉は、漢語に対し、日本固有の言葉という意味でも使われますが、特に、平安時代に盛り上がり、訓読みの平仮名で書く日本古来の言葉を指すことが多く、含蓄に富み、美しい響きを持つ日本語として最近注目されています。大和言葉には、素晴らしい語感をもつ名詞や動詞が多く、また、人の感情や動作を表現し、人の感性に訴える自然や物事の有様を示す形容詞や副詞が多いのも、特徴です。

いくつかを例示すると、名詞では、曙、黄昏、朧月、身嗜み、躰け、物腰、いのち、こころ、など、動詞では、ねぎらう、いわたる、和む、育む、などです。形容詞では、可愛い、悲しい、優しい、有り難い、切ない、恥ずかしい、ほほえましい、など、日常用語で、味わいのある大和言葉が多く、副詞では、生憎、今更、いっせ、せめて、どうせ、など、翻訳に苦労しそうなものや、ちよっと、どうも、など、文脈で意味の変わるものもあり、多彩です。

別れの挨拶「さようなら」は「左様ならばお別れしましょう」の略、「お勘定」の意味で使われる「お愛想」は「お愛想がなくて恐縮ですが、お勘定をお願いします」の略、何れも、日本語の語源の面白さ

を示す例です。「お近づきになりたい」といった表現なども、相手を立てながら、遠慮がちに自分の気持ちを率直に述べる、正に大和言葉の典型的な例と言えましょう。

このような大和言葉の、微妙な意味合いや語感を、外国語で表現したり説明したりすることは、至難の業です。俳句や和歌についても同じことが言えます。所詮、これは無理な話と、はじめから割り切ってしまう人も多いようですが、やはり、含蓄のある言葉や言い回しを外国の人達に理解してもらおうべく、そのための努力が続けられてほしいものです。同時に、「もったいない」や「わび」「さび」などのように、世界に通用する日本語がもつともっと増えてもよいと私は思っています。

多様な敬語と丁寧語

日本語の難しさとして、敬語が多く、しかも、その用法が多岐にわたり、状況によって変わる点がよく挙げられます。確かにその通りだと思います。通常分類でも、相手に敬意を表す尊敬語、自らを卑下して相手を立てる謙譲語、「です」「ございます」のように丁寧な言い方の丁寧語の三種類があり、それに、「申す」「参る」など、相手を立てて自分の動作を丁寧に述べる丁寧語、「お水」「お風呂」など、相手と関係なく、言葉自体を美化する美化語を加えると、五種類の分類になります。

英語にも、敬語 *honorific language* はあり、仮定法を使って丁寧な表現にしたりします。しかし、敬語を何種類にも分類して多用するのは、日本語だけです。そのため、敬語をきちんと正しく使える人は、日本人でも少数と言われています。

文法の用語である受身形に、尊敬の意味の敬語があることも、日本語の特徴の一つです。具体的には、「れる」「られる」などですが、この受身形には、受身、尊敬、可能などの異なる用法があり、その何れであるかは、文脈で判断しなければなりません。

接頭語、接尾語に多数の敬語があることも、日本語にユニークな特徴です。尊敬語だけでなく、謙譲語の接頭語や接尾語もあります。拙者、愚息、粗品、寸志、私共などです。日常茶飯事に使う「お茶」「ご飯」なども、考えてみると、他の言語には見られない日本語特有のものであります。

「御苦労様」「お疲れ様」「お互い様」など、よく使われる言葉で、敬語が二重になっているものもあります。一般論として、敬語は、多ければよいというのではなく、過剰敬語は、逆効果で、避けなければなりません。これが敬語の難しいところであり、間違い易いところです。一例を挙げれば、「お召し上がりになりますか」「御出席されますか」などは、過剰敬語の例となります。

曖昧語は気配りの表われ

日本語は曖昧とよく言われます。十五世紀に日本を訪れた、ポルトガルの宣教師フロイスは、「ヨーロッパでは言葉の明瞭さが求められるが、日本では曖昧な言葉が、優れた言葉で、最も重んぜられる」と書いています。確かに、日本語は不明瞭で、判りにくい面がありますが、それはむしろ、意図的、意識的に曖昧にしている場合が多いのです。

一つは、自らの発言に自信がなく、断定的な表現を避ける場合ですが、もう一つは、相手への気配り

に基づくものです。相手に対して、追い詰めたり、決めつけたりせず、相手に、反論や異論があれば、それを言いやすくするという、相手への配慮です。これは、東洋に比較的多くみられる発想です。このような配慮には、人間関係を円滑にする効果があります。

「NOと言わない日本人」ということが外国人の間で話題になります。これはどちらかというと、ネガティブな意味で言われることが多いのですが、日本人の側からすると、できるだけ相手を傷つけないので、NOと言わなくとも、文脈なり、雰囲気なりでNOを感じとって欲しい、ということになるわけです。誤解を避けるためには、はっきりNOというべきだというのが日本人へのアドバイスですが、同時に、そういった日本人の気遣いを、外国人にも知ってもらいたいと思います。

意図的、意識的な曖昧語の他に、日本語には「まあまあ」といった意味不明瞭の言葉が多いのも事実です。相槌の言葉がYESととられたり、YESとNOがはっきりしないことも、よくあります。「いい加減」「結構だ」などのように、文脈によって全く違う意味になる言葉もあります。

また、婉曲話法とか、ぼかし言葉といって、わざわざ遠回しに、判りにくく表現することも、日本語には多くみられます。言語は、意思疎通、相互理解の手段であるわけですから、やはりそれが実現されるように、双方の努力が肝要です。すなわち、遠回しや曖昧な表現をする場合には、誤解を生まないような配慮と努力が必要です。

「てにをは」の活用

「てにをは」は、江戸時代、本居宣長が「てにをは、ひもかがみ」という本を出した頃から、助詞の代名詞のような形で一般に定着した言葉です。助詞とは、名詞などの後につけて、その名詞と他の言葉をつ結び付ける、日本語特有の品詞です。英語などの前置詞に対応しますが、前置詞よりも用法が多彩で、目的語や補語を示す働きもします。助詞には、「てにをは」の他にも、一字ないし二字の助詞が十数個あり、それぞれが多岐にわたった用法で使われています。

助詞が素晴らしいのは、漢字とよく合い、簡潔で見やすく、しかも、細かい、微妙なニュアンスを示すことができることです。これも日本語が漢字と仮名の複合言語であるからこそできるものです。その意味で、助詞は、日本語が生み出した大きな財産といえます。例えば「学校へ行く」と「学校に行く」、「友達に会う」と「友達と会う」、「父と似ている」と「父に似ている」、「彼が好き」と「彼を好き」など、また、「私が」と「私は」との区分けなども、奥の深いものです。このようなニュアンスの相違を、外国語で説明するのは、なかなか難しいことです。

言語学者によれば、言語は、人称、性、数などによって言葉の語尾の活用などが細かく分類される屈折語 inflectional language (インド・ヨーロッパ語)、語形変化のない孤立語 isolating language (中国語など)、語幹に接辞の伴う膠着語 agglutinative language の三種類に分類され、日本語は、助詞という接辞の活用により、膠着語に属する由です。膠着語は、日本語の他には、フィンランド語やトルコ語があるだけで、少数派ですが、「てにをは」、すなわち、助詞の活用によって、日本語はきめの細かい奥の深い言語になったといっってよいと思います。これも、日本語が感性重視の言語である、一つの表われと言ってよいでしょう。

以上、日本語の色々な側面につき説明してきましたが、これまでの諸点を次のとおり列挙するだけでも、日本語は、言語として、国際的に注目すべき言葉であることが判ります。

- 1 複数の文字で成り立つ言語
- 2 音声文字、表意文字の双方を持つ複合言語
- 3 読み方に音読みと訓読みがあり、しかもそれぞれに複数の読み方のある語が多い
- 4 同音異義語、同音類語が多い
- 5 振り仮名を付すことができる
- 6 縦書きでも横書きでも可
- 7 主語よりも主題が中心
- 8 擬音語・擬態語が極めて多い
- 9 敬語が多岐にわたり用法も複雑
- 10 婉曲話法 遠回しの表現が多い
- 11 五感に関わる表現が多い
- 12 助詞の多彩な活用

このように日本語は、言語として学習し研究する価値のある言語であることは明らかです。世界で日本語を勉強する人が増えていることは、誠に嬉しいことで、是非ともその傾向が継続することが望まれます。日本語を勉強することが実利に結び付くことも、重要ですが、同時に、言語としての観点から、日本語に関心と興味を持ち、一人でも多くの人が、言語としての日本語に触れる機会があることを期待したいと思います。

私にとって、初めてのチャレンジであった、今回のシリーズも、何とか完結しました。お読み頂いた皆様、有難うございました。読み返してみても、インターネット配信ということもあってか、比較的、自由に、気持のうえでも楽に、思いのままを、そのまま書かせて頂いたような気がします。

もちろん、ひとりよがりの点、言い過ぎた点、詰めのない点など、多々、あったと思いますが、私なりの問題提起ということで、ご容赦頂ければと存じます。特に、第十八章を始め、終わりに近づくとつれて、その感が強くなってしまったように思います。

今回のシリーズは、外国の一般の方々に、日本を、そして、日本に定着している東洋を、こんな点もあるということで紹介し、理解を深めて頂ければ、というのが、まず最初の動機でした。そして、それを、日本の方々にも知って頂きたい、というのが、次の動機でした。

ただ、書いているうちに、日本の方々に向けての部分が、結果として、かなり多くなってしまいました。英語版作成にあたっては、その点は、外国人向けと言うことで、調整をしなければならぬと、考えています。



ベルギー大使時代に収集した 450 種類の
ベルギービールの前で
(アサヒビール吹田工場に寄贈)

本シリーズでは、日本のこと、東洋のことを言及するうえで、西洋との対比が、随所でできます。本来であれば、対比である以上、双方についての記述をバランスよくしなければなりません。西洋についての説明が不足気味です。その点で、冒頭の「はじめに」で触れたように、本論は、洋の東西の優劣を論じたものではないこと、そしてまた、私自身、自らの経験を通して、西洋の素晴らしさを数多く体得していることを、改めて付言しておきます。

今回のシリーズでとり上げた諸点は、外国の方々に伝えたいことであると同時に、日本の方々にも、知って頂きたい、理解して頂きたい点を、私なりにまとめたものです。既に、よく心得ておられることが多いと、思いますが、改めて思いを馳せて頂ければ、幸いに存じます。

特に、日本の若い世代の方々、とりわけ、外国で教育を受けた方々などに、お読み頂き、日本人として生まれてよかったという、「喜び」と「愛着」と「自信」を、深めて頂ければ、存外の喜びです。これから先、若い方々は、外国の方々との交流の機会が、飛躍的に増えると思うからです。

英語版については、どういう形で、皆様のお目にとまるか、考え中ですが、何とか本年中には、完成したいと思っています。完成のあかつきには、英語版も、ご一読の程、よろしくお願い申し上げます。

なお、今回のシリーズ作成にあたっては、私の手書きの原稿をタイプライトし、ネット上に配信して頂いた、(株)アスカエンタープライズ 田中賀鶴代さんに、お世話になりましたことを付記させて頂きま

著者プロフィール



1934年横浜市生まれ。東京大学法学部卒。

ケンブリッジ大学修士課程修了。

40年間の外務省勤務

(うち7カ国、計20年の外国生活)

外務本省：儀典長 (1990-1993)

在外勤務：シドニー総領事 (1985-1988)

ベルギー大使(1994-1997)などを歴任。

その後、国立京都国際会館館長 (1998-2008)

現在も東京と京都の往復生活が続く。

中高時代より鎌倉円覚寺で参禅、早くから日本文化、東洋思想に関心を持つ。

現職：平安女学院大学客員教授

京都外国語大学理事

国際京都学協会副理事長 古典の日推進アドバイザー

著書：ベルギー随想 (日本語・英語版)

今回のエッセー集の英語版 (今年発表予定)

第1章から第5章までは下記のアドレスで公開しています。
すべてをご覧になるには有料です。（税込1,000円）
下記にお振り込み完了後、お客様に送信させていただきますので、お手数ですが、
ktanaka@arica.co.jp に
件名【 中村順一エッセー 】とお書きの上
「メールアドレス」「お名前」をお知らせ頂きますようお願い申し上げます。

編集協力：有限会社アリカエンタープライズ
代表取締役 田中賀鶴代
〒567-0831 大阪府茨木市鮎川2-32-25 アライブ21 2F

お問合せ先：090-1910-2006

E-mail: ktanaka@arica.co.jp

URL: <http://arica.co.jp/nakamura.html>

「これだけは世界に発信したい日本についての18章」

お振込先：ゆうちょ銀行
有限会社アリカエンタープライズ
記号14010 番号11484491